

仏教思想研究部会の回顧と展望

橋

本

芳

契

仏教思想研究部会の回顧と展望

橋 本 芳 契

目 次

まえがき

仏教思想研究部会とその開催記録

- ① 昭和三十八年度
- ② 木津無庵の師範巡講
- ③ 暁烏敏と維摩経
- ④ 研究部会の開催回数
- ⑤ 指導者と部会参加者
——淡窓威宜園と明治の学制——
- ⑥ 部会経営と研究生の協力
- ⑦ 研究室スタートの頃

- ⑧ 暁烏文庫の由来
- ⑨ 基礎教養講座
- ⑩ 部会テキストの変遷
- ⑪ 社会教育への関心
- ⑫ 回顧より展望へ

むすび

まえがき

本誌前号、前々号（第十二、十三両巻）において新合賢太郎教授が、「金沢大学と社会教育——金沢大学におけるハ大学開放活動Ⅴの回顧と展望——」を載せられた。しかもその冒頭には、「本稿は、戦後の新しい教育制度のもとで

大学が発足した昭和二十四年から、金沢大学の八学校開放活動Vの足どりを回顧して、その実態を明らかにするとともにその意味するところをさぐり、今後の展望について述べようとして筆を執ったものである」とし、とくに「その意味するところをさぐろう」というのは、「社会教育機関としての大学」の在り方から見て、「金沢大学の学校開放活動の実績をどう評価するか、という意味である」とされた。

本稿は、新谷教授による前記論文が「金沢大学と社会教育」の主題のもとに、総説的に当社会教育研究室の過去二十年にわたる経営の実際と意義をのべられたに對し、とくにまたその結びにおいて、「部会を直接主宰し指導しきたったものが現に在室することであるから、その者に順次各部会の模様を執筆させたい」という意味のことを言っておられるので、当初来、仏教思想研究部会の担当者であった筆者として、最古参のゆえに、まず順序として各説の第一番に且は命じられるままこの筆を執ることになったもので、勿々の間、準備もとより不十分で、ほとんど体をなさず、整然とした総説に対してはまことに不遜で勝手きままな筆勢で、貴重な本誌紙面をけがすはわが心にもとうてい許容しない所であるが、歩みは歩みとして確かに、筆者としては研究室の前身、暁烏文庫社会教育研究室時代からの関係者であり、他の一面、本研究室にゆかりふかい金沢大

学暁烏文庫委員も、昭和二十五年四月二十九日のその創設以来拝命してきているので、記事としてはまことに混乱したものではありませんけれども、詳細な将来、加筆し増補することとして、とりあえず執筆期限内に稿を成し得たものだけをここに披露することとした。切に読者の諒とされんことを乞う次第である。

仏教思想研究部会とその開催記録

人間の記憶ほどある意味において不確かなものはない。しかしたとい一行一句であっても記録になったものがある、それに触れてすぐに忘れさっていたことまで生新によりみがえってくるから不思議である。こんどこの記事をつづるにあたって再三、例によって旧旅団司令部の建物内にある社会教育研究室に行き、西村四郎市室主にロッカーをあけてもらって関係資料をさぐったが、なにぶん累々と山積している多数資料中から、厳密に仏教思想研究部会関係だけのものを判別してもち出すことは容易なわざでなかった。ただ辛うじて昭和三十八年度以降、十一年分の研究部会開催月別記録ノートが四冊にして綴り合わされているのを持ち出すことができたので、もとより不十分きわまることではあるが、その開催記録を一貫した縦軸としてこの報告書を成していきたいとおもう。全体としてはその記録に表

明されたものの説明を介して、三十八年度以前にもさかのぼり、あるいは暁烏文庫の由来についてまでしるしていくことであるから、順序不同で、一見随想集ふうにさえ見られようことをおそれるが、研究部会の指導と経営にあたってきた筆者の心境などを表明しようとしたので、そのようになつたものであることをあらかじめ諒承を得ておきたいとおもう。

① 昭和三十八年度

このころは、「基礎教養ゼミナール・仏教の研究」と称し、原則的には月二回、年間（五月から三月まで）に前後一五回を開催している。参加数は累計一一七名で、毎回必ずしも多くないが、出席者はつねに熱心であつたように

〔仏教思想研究部会開催表〕（その一）

昭和38年度			
回数	月 日	人	数
(1)	5.25	2	1
(2)	6. 8	1	5
(3)	6.22	1	4
(4)	7.13	6	
(5)	7.20	5	
(6)	9.14	6	
(7)	9.21	7	
(8)	10.12	3	
(9)	11. 9	6	
(10)	11.16	4	
(11)	12. 7	4	
(12)	1.18	8	
(13)	2. 8	5	
(14)	2.29	7	
(15)	3.28	6	
合 計		11	7名

記憶する。テキストとしては福田正治編『仏教聖典』（名古屋、黎明書房刊）をもちいた。

ここで社会教育と仏教、あるいは社会教育における仏教のあつかいにおいて一番困難な問題点である教授者と聴衆とのあいだの視点のあわせ方について一言しておこう。

維摩經の仏国品第一に、歎仏偈中に、「仏以一音演說法衆生随類各得解」（仏は一音をもつて法を演説したまい、衆生は類に随つて各々解を得）という句が出る。その前後には、(1)「大聖法王は、衆の帰するところ。心を淨め仏を觀じて欣ばざるはなし。各々世尊の、その前に在るを見る、これ則ち神力不共（ふぐう、共にしない、つまり仏だけ）の法なり」とか、つづいて右のように、(2)一音演説を随類得解し、「皆謂世尊同其語」（皆、世尊がその語を同じくすとおもう）のも「神力不共の法」、さらに、(3)「仏以一音演說法、衆生各々随所解（衆生各々、解する所に随い）普得受行、獲其利（あまねく受行するを得て、その利を獲る）」も神力不共の法。(4)「仏以一音演說法、或有恐畏（くい、おそれる）、或歡喜（かんぎ、よろこぶ）、或生厭離（おんり、生きることを厭わしくおもう）、或斷疑（だんぎ、うたがいを晴らす）」もこれ則ち神力不共の法なりという四段にして仏の神力不共の徳を讃歎した句が出る。これを整理すると、

- (1) 淨心觀仏……身業……信
 (2) 随類得解……口業……解
 (3) 名随所解……意業……行
 (4) 恐畏断疑……三業……証
- (私解)

ということになろう。

そこで申したかったのは、教授者はある意味で「仏座」に着き、聴衆（研究生）はその仏座に着いた者に対向して「仏法」を聞きとる関係にあり、そのばあい、語り手はひとつことば、同一の思いでも、受けとり手は各人各様であるということばの意味する真理についてであった。「仏以一音」というこの経句から、維摩経の思想的立場をまた「一音教」（いっとんぎょう）というくらい、この仏国品、歎仏偈の一句は教理思想的にも重要なのである。

なにもこれは昭和三十八年度にかぎっていうべきことではもとよりなかったが、その年から数年にわたりテキストとして用いた前記『仏教聖典』が、やはりこの維摩経を背景としてできたものであったから、その方に話しをおとしていったが、ふたたびいうと、仏の一音は開けば多教多言、万音一切音ともなるのであり、またこれを閉じれば無音、黙不二（維摩経、入不二法門品第九参照）ともなるのである。そういう開閉不二、語黙不二のところに一音教の真趣意があり、また仏教そのものの思想的特色があるのである。

そういう世界を人間の生き方につけていうと、さきの(1)信、(2)解、(3)行、(4)証——じつはこの次第は華嚴経の教理的立場なのであるが——の第四の「証」について、「或恐畏」「或歡喜」「或厭離」「或断疑」の句があったが、これまたボサツの四弘誓にはめて考えると、

- 恐畏……煩惱無尽誓願断
 歡喜……仏道無上誓願成(証)
 厭離……衆生無辺誓願度
 断疑……法門無量誓願学(知)
- (私解)

ということにもなろうと考えるので、わたしどものこの世における人間としてのあり方も、一音の論理からすれば、生きて生ぎず、生ぎずして生きる、さまざまな生き方を包括して一元的にいうと、やはり「一生」というなかにおさまる。一生は多生であり、また無生ということにもおさまるのであろう。

② 木津無庵の師範巡講

ここに福井県生れの傑僧で木津無庵（一八六六——一九四三）というひとがあった。生涯、維摩経を講讀した。いまわたしは手もとに、大正二年三月十日にこのひとが名古屋の仏陀会（同市中区南武平町五丁目）から「非売品」で出した『維摩経講纂』という書物がある。ある意味ではそ

の後身でもあるので、同じ名古屋で戦後にスタートした書林「黎明書房」の刊行の『仏教聖典』についてこういう説明のしかたにおとしていたのである。

いかにも無庵という考えかたは禅宗的で、またよほどインド的でもある。禅では「一所不住」と言い、「一所不住の徒」といえば禅門のひとの自称、むしろ誇称でさえあった（前川利鎌遺稿『学者の人間』——岩波。松岡譲編に「一所不住の徒」のすぐれた禅文が収まっている）。しかし木津無庵は真宗大谷派智敬寺（越前・三国）祐謙の次男で、本名を裕精といった。越前小教校（大谷派の設立経営）を明治十三年に中退、ついで入学した福井師範をも同十五年に中退。ところが後年、このひとは全国の師範学校を奉仕的に何度も巡回して青年学徒に向い仏教精神で日本の将来を樹立すべきであると熱心に説いてまわったことで有名なのである。とくに師範教育に着目して仏教を語ろうとしたところに、また同時に日本の学校教育の精神的真動向を探索するに一助たるものを発見すべきであらうし、現在の大学教育と社会教育の視点からも興味ある一事であったのである。

越前（福井県）は小藩ではあったが、幕末維新時（無庵の出生は慶応二年）には態度がハッキリしていたせいもあり、明治以後、かずかずの傑れた人物が、政界からも学界

・文化界からも出ている。加賀は大藩ではあったらうけれども、その頂点（百万石）を維持するために、対他面では警戒的もしくは抑制的なところもないではなかった。福井・石川（能登・加賀）・富山（越中）の三県は、文化的には将来ますます地域差を少なくして一体化していくものと思うが、教育関係者でも思想的交流ということが最も大切であらう。戦前から戦時中にかけて、各府県に文部省の思想的な出さき機関として、府県別の「思想対策委員会」ができていたが、これなどは反民主的で、交流どころか、明らかに統制であった。社会教育というものは、原則的には自発学習である。したがって経営上にはさまざまな経費面はじめの困難がともなう。木津無庵祐精はさきのごとく社会奉仕的に全国の師範学校を遊説してまわった。いまこのひとのことを詳説するつもりはないが、無庵が名古屋にさきの仏陀会を開いたのは明治三十三年（一九〇〇）で、それから十二年後の明治四十五年には第八高等学校仏教青年会員の寄宿舎として誠明学舎を設けた。八高（名古屋）は金沢の四高（明治十九年創立）などとちがひ、そのできたのは明治三十年代である。しかし四高に北陸仏教青年会（明治二十七、八年ごろできた）を背景とした崇信（そうしん）学舎が出来たのは名古屋の誠明学舎の創立と時期的に大体相前後している。のち（大正八年）無庵は上京し、東京中

野にも東京誠明学舎を設けて八高出身の学生を寄宿させるのである。そういう精神を催させ、そういう仕事にとりかからせるようなものが大乘仏教なのである。

無奄は震災後の大正十四年に名古屋に戻り、同地に新たに仏教協会を設立——さきの仏陀会の発展——し、『新訳仏教聖典』を刊行した。これは千頁以上にのぼる龐大な本で、したがって一般に普及させるためには、別に『縮刷版』を用意する必要がある。その縮刷版「新訳仏教聖典」の後身がじつのところ、わたし昭和三十八年度ごろから、仏教思想研究部会のテキストに用いた『仏教聖典』で、その頃のこの研究部会参加者は、おそらく現在にいたるまでこの書物を机上から離さないでいるはずである。ただあわせて言いたいことは、本来、「老若男女、学歴差」一切を問わないで入室させてきている当研究室のたてまえ上、新谷教授が総説でのべられていることでもあるが、依然、仏教を語る場合の焦点のもちかたに敷衍をした。そのことの説明がまだ終わっていない。

③ 暁烏敏と維摩経

そのまえに、くどいようであるが、維摩経には、社会教育精神が旺盛に、また縦横無尽に流がれているのであって、わたし昭和三十六年秋から冬にかけての季節に東南アジ

アからインドまで仏跡廻礼の旅をしたが、經典にかいてあることの本当の理解は、やはりそうした旅行によって得られたといつてよい。もとより現在のインドは仏教を表面き失っているかに見えるが、宗教精神はそう簡単に消えうせるものでない。おそらく現在の中共についても同様なこととがいえるのであろう。そういう点では「仏教思想研究」ということを標榜しながら、研究室の一研究員としてその関係部会を主宰する筆者自身の仏教理解や仏教への臨みかた、アティテュードをまず最初にのべるべきであったと思うが、わたしとしては研究生と一緒にあって、とにかくふかい宗教的価値のあるものと信じられる仏教思想について、ともどもに分かり合っていこうというのが根本のかまえで、それ以上の何ごとでもなかった。はじめて暁烏敏師に出会ったのは昭和三年の春で、十七才であった。維摩経に関心するようになったのはやはり師の法話中にそれが出たからなのであろう。この経については、山田無文師（臨済宗）が毎月『大法輪』誌で続講され、現在すでに八十回以上におよんでいる。

たしかに維摩経はとりわけ禅宗で大切にされてきた大乘經典なのである。しかるに暁烏師の先生、清沢満之は東大（当時国立大学は東京一校だけ）で西洋哲学と同時に仏教印度哲学を学ばれた。そのころの東大には、禅の原坦山

(曹洞宗)、浄土教の吉谷寛寿(富山県出身)らがおられた。とくに坦山は維摩経を高く評価し、明治一二年に東大講師となるやまずこれを講じられ、のち大乘起信論にうつられるのである。起信論に転じたのは学生の希望によったものであることが『坦山和尚全集』でわかる。いったい仏教研究には「経」からすすめていくのと、「論」からかかるのと、さらに第三に「律」の方から進めるのがある。

現在の東大教授(印度哲学科主任)平川彰氏などは、律蔵の研究から次第に視野を広め、いまでは仏教研究全体の大権威のひとりであるが、わたしは近年、このひとの『現代人のための仏教』をも研究部会のテキストにしてもちいたことがある。それはさきの『仏教聖典』にくらべれば、はるかに小部なものではあるが、まことにわかりよく仏教の教理理解をたすけるために書かれたもので、この本もくり返し研究生と一緒に読んだ。

それは別として、わたしは学部(法文)学生のため鈴木大拙英訳の欧文『大乘起信論』(岩波、大拙全集、三三巻中には収めず)をテキストとして講じたことはあるが、研究室ではつとめて「経」を中心にするようにして講義もし、不十分ながら指導もしてきた。

なおわたしは依頼をうけて暁烏敏全集二三巻の編集にたずさわった一人であるが、先生の全集は、聖典編八巻、思

想編十巻、生活編五巻である。そのうち聖典編には浄土の三部経はじめ真宗の七高僧、つまり親鸞教学の伝統を形づくった人々の著作類をはじめ親鸞自身の著を講じたものが収まっているが、ただ唯一の異例として「維摩経仏国品」の講義がそれに含まれているのは興味ぶかく、またすこぶる注意すべきことのように思う。

暁烏先生は、仏教を世界に広めようと考え、それにはロシア語の勉強がいるとして、上京して外語学校(東京外大の前身)に入られた。そして二葉亭四迷などにも習われたということであるが、おそらく東本願寺の東京留学生として上京されたのであろうが、その頃本山にいた石川舜台(金沢出身、長町道林寺)戦後ずっと長く前記崇信学舎はこの寺内にあった)から勧告され、語学よりも仏教学ということで清沢門下になられたようである。本願寺の留学生という制度は明治・大正・昭和とながく続いていたもので、当時の日本の学問態勢がうかがえる一事である。筆者も昭和十年代にしばらく東京留学生で月額二十円支給された一員である。小学校の代用教員が月額二十八円で、当時としては相当な額であったと思う。

そういうことで、維摩経は浄土教の立場から大切な経典である。それどころか、在家仏教という観点からすれば、維摩経をはずしては真宗の立場もあり得ないのである。さ

きに「浄心にして観仏する」というこの経の一句を引用したが、それがすなわち念仏の道にはかならない。「心、浄（きよ）ければ、土（国土・環境）も亦きよし」というのが念仏に具現した浄土教の世界なのである。戦後の学界は民主主義的変革をとげて、研究発表の自由が一段とすすめられた。わたしは学生時分から約二十五年つづけていた維摩経研究の成果をつぎつぎ発表するうち、果せるかなたとえば禅宗の大学者、駒沢大学の増永靈鳳博士（福井県出身）から、「維摩は禅経。決して念仏の経に非ず」と攻撃された。しかしわたしはひるまなかつた。それどころか禅でも念仏でもない、禅も念仏もそこから出ているその原点をさぐり当てるにその後も十年二十年と研究を続行しているうちに、大体、仏教というものがどういうものか、わかりかけてきた気がする。

維摩経というたつた一部の経を徹底して明らかにするためには、いきおい関連事項を追っていくうち全仏教の範囲

維摩経の著書

書名	年 月	発行所
維摩の再発見 維摩経の思想的研究 維摩経新講	昭三〇・八 昭四一・二 昭四二・一一	大蔵出版 法蔵館 黎明書房

におよぶことになるのである。現在までに筆者が出した維摩経関係の書物は上掲の数冊である。

このうち特に『維摩経新講』を昭和四十四年四月からしばらく、さきの『仏教聖典』にあわせてテキストに用いたことがある。

『仏教思想研究部会開催表』（その二）

昭和39年度			
回数	月 日	人 数	備 考
(1)	5.23	9	出雲路研究員代行 テキスト『仏教聖 典』以下同
(2)	6. 4	11	
(3)	6.18	6	
(4)	7.16	9	1.伊豆山善太郎講 師（心学の話） 2.暁烏文庫見学 宮野徳芳ほか
(5)	9. 3	7	
(6)	9.17	4	
(7)	10.15	4	
(8)	10.29	6	
(9)	11.12	6	
(10)	11.26	5	
(11)	12.10	4	
(12)	12.17	2	
(13)	1. 7	7	
(14)	1.21	3	
(15)	2.11	5	
(16)	2.25	4	
合 計		92名	

④ 研究部会の開催回数

研究部会の開催日数は、当初、一箇月二回の割で、いま考えると随分根気よく教授者も研究生もつとめたものであったと思う。昭和四十年からはそれを月一回程度に減じたのは、それまでの社会思想、社会心理とこの仏教思想の三部会のほかに、いくつかの部会が新設されて、研究生が兼ねて出席しにくくなった事情からであったはずである。最近では開催日も土曜日の午後固定してきているが、はじめごろは曜日を部会の日に当て、仏教思想は木曜が当たり日であったことが相当ながい。どうしてその頃、そんな時間の都合ができたのか、いま考えても不思議なくらいである。同時に、それでは勤め人で土曜日の午後が好都合というひとを満足させ得ないというような反省から昭和四十一年度ごろから大体、土曜日の午後にし、人数もふえ、同時に出席参加者の顔ぶれも多少ずつ変わってきたように思う。

その頃、研究員会議の席で、戸頃（社会思想）沢田（社会心理）橋本（仏教思想）の三人が多年、子がいのように研究生をなつけて指導しているが、これを全体的に綴りこんで、共同研究のふうにして研究員も総がかりで横つながらに關係しあう中に三部会その他を織りこめないものかという相談が出て、そういうことからすでに新谷教授の総説

昭和41年度			
回数	月日	人数	備 考
(1)	5.21	24	テキスト『 <small>仏教</small> 聖典』以下 妙成寺見学 共同研究会
(2)	6.18	11	
(3)	7.30	25	
(4)	9.17	15	
(5)	10.15	12	
(6)	11.26	31	
(7)	12.10	13	
(8)	12.24	16	
(9)	1.14	11	
(10)	2. 4	17	
(11)	3.11	14	
合 計		189名	

〔仏教思想研究部会開催表〕（その四）

昭和40年度			
回数	月日	人数	備 考
(1)		12	入室式 テキスト『 <small>仏教</small> 聖典』以下
(2)	4.22	13	
(3)	5. 1	11	
(4)	7.17	7	
(5)	9.25	7	
(6)	10.30	4	
(7)	11.18	4	
(8)	12.11	7	
(9)	1.29	5	
(10)	2.19	8	
(11)	2.26	6	
(12)	3.19	9	
合 計		93名	

〔仏教思想研究部会開催表〕（その三）

にも説明のあった「共同研究会」が数年もたれ、年ごとにテーマを新たにし、仏教思想研究部会のメンバーも分担した小題目のもとに積極的に問題とのとりくみを進めたのである。

⑤ 指導者と部会参加者

――淡窓咸宜園と明治の学制――

ここで一言したいのは、さきのような研究生を特定の研究員（教授者）が極端にいうとわたくしする、あるいは研究部会を閉鎖的に開催し継続するという批判、もしくは非難としてもうけとめかねないようなことが、関係者としてのひがみ心からかもしれないが、コッソリ聞かれたようにも思ったが、それは同時に、社会教育の、あるいは学校教育をもふくめて教育一般のもつ、むしろ「教育愛」の問題でないかとおもう。研究員会議では、毎年度の終りに、次年度の事業計画について話し合いがあり、たとえば、仏教思想部会」は新年度は引き続き「橋本」にたのみたいが、それで「よろしい」か、と応諾をもとめられては継続してきたもので、私心で部会の運営にのぞんだことは一度もない。しかし教育というものは、ある意味では最も人為的なしわざのもので、だからこそ「教育愛」の問題にもなるの

で、かつて『制服の処女』ともいったか、西洋映画で、教え児（女兒）が特定の女教師を私慕するのを、いわば同性愛の問題であったかもしれないが、その教師は公平に冷静に善処していった内容のものでなかったかと記憶するが、そういう私的なからみ合いは教育をみだすものであるから、公教育ではとくに注意していく必要がある。

つぎにおなじ教育でも社会教育の方が学校教育よりは主催者側の行事経営への具案度が嗜好的で高いから、余計にその教育効果の評価（エバリユエーション）が査定しにくいのである。しかし教育にはつねに実効の反省と記録がいる。いわゆる日誌、日記の意味がたえず問うていかねばならぬ。旧軍隊でも、軍隊生活そのものが大きな教育事項であつたから、日々その成績が「軍隊手帳」に記入されていた。社会教育はその点、随意的もしくは解放的になりがちであつて、教育効果の評定はなしがたいのである。そういう点では累計四千人、五千人の塾生を擁した九州日田（肥後、大分県）の広瀬淡窓の咸宜園での万善簿のごときが、大いに参考にされる。明治五年の学制々定には咸宜園の関係者が召し出されてその九等級別が小学上級四年、下級四年の級別制に参照利用されたのである。

⑥ 部会経営と研究生の協力

さて研究生中には、仏教についてひと通り学習し終わった者もあって、部会の運営にはとくに協力的であった。そのひとりとは故島口雅光氏である。同氏の研究室への出入りは昭和三十九年五月から、同四十五年二月まで六年間であったが、とくに昭和四十一年七月には柴垣の妙成寺（中山住職）まで研究生が巡科する機会をつくられた。当日の参加者は二十五名で、住職の法話もあり、境内の案内もうけた。こういう名利見学の希望は早くからあり、その後も那谷寺（小松市）、大乘寺（金沢市）等についてその計画がなかったわけでないが、世話が容易でなくてそのままで今日に及んだ。島口氏は戦後まもなくタイ国にわたり、比丘生活二年を体験し、またインド仏跡巡拝も経験したひとで、ときには自坊経王寺（日蓮宗）を研究生の学習のため開放して下さることもあった。同じく福井栄太郎氏もインド仏跡巡拝の体験者であり、昭和四十二年五月から同四十六年一月まで四年間研究室に出入りされた。そういう思い出をひとりひとりについて為していくと全く際限ないのである。

福井氏は現在、石川県宗教連盟の事務局長であるが、研究室での仏教学習を社会教育面で現に活用しているひとは相当数あるはずである。大学教育と社会教育との関係を正しく問うていくには、出席者の人数とか、あるいは部会の開催回数とか、そういうものはひとつの見当をつけるメドで

しかないのです、本筋論としては、第一に大学の社会的地位とその教育機能を考え、第二に学校教育全体において大学の占める特殊な権限なり社会的影響を考え、そして第三に社会教育そのものの歴史的現実を反省して、その大学教育との結びりを理論的に跡づけする必要があるであらうとかがえる。そしてこれらのうち第一と第二についてはすでに新谷教授の総説中で明確にされたことも多いのであるが、仏教思想研究部会を多年にわたり直接経営してきた筆者としては、とくに郷土の社会教育史を仏教、したがって仏教を中心とした学習事実に即して開明したいものとかんがえ、それには日本の社会教育史の起源そのものに立ちも

〔仏教思想研究部会開催表〕（その五）

昭和42年度			
回数	月日	人数	備 考
(1)	5.20	24	テキスト『仏教聖典』以下 共同研究会
(2)	6.24	23	
(3)	7. 8	20	
(4)	9. 2	17	
(5)	9.30	20	
(6)	10.28	9	
(7)	11.18	40	
(8)	12.23	11	
(9)	1.27	10	
(10)	2.24	11	
(11)	3.16	13	
合 計		198名	

どって考えるべき所があるうとして、本研究室に機関誌『社会教育研究』が年報として発刊されるに当り、「日本社会教育思想史」の執筆を思いたち、その創刊号（昭和三十五年八月）には、まずその「序説（一）——聖徳太子と社会教化精神」を載せたのであった。

⑦ 研究室スタートの頃

記事はもどるが、研究室スタートの当初は、さきの総説にもあったごとく、研究分野というかその諸領域として、(一)原理、(二)歴史、(三)調査、(四)実践の四部門を立て、おそらく当時八名であった研究員が、神力・戸頃両教官は原理、橋本と西村教官が歴史、森・藤田両教官が調査、永守・新谷両教官が実践でなかったかと記憶する。これら八名のうち故人となった森正夫（社会学）教官と戸頃教官（倫理）ならびに橋本（哲学・宗教学）の三人が法文学部教官で、神力（教育学）、西村（倫理）、藤田（国語）、永守（国史）、新谷（哲学）の五氏は教育学部教官であった。法文のふたりは残っているし、その後同学部から三島宗彦（法学）平野秀秋（社会学）等諸教官の参加もあったが、現在としては二宮哲雄教官（社会学）を加えて三人である。教育学部としては新谷氏が残るだけで、他はみな退官とか転任とか、あるいはその他の事情でかわってしまった。その

代り、金沢大学六学部中、医工理の三学部以外の各学部、ならびに教養部からの研究員計十名が、それぞれに協力し合って研究や調査・実践のことに従事しているのである。しばらくそうした方面のことも併記して、研究室開設の当初から、いな社会教育研究室と名のつた以前の時期からの関係者としての所見をしるしおき、研究室将来発展のための一助にならせたものである。

〔仏教思想研究部会開催表〕（その六）

昭和43年度			
回数	月日	人数	備考
(1)	5.18	17	テキスト『維摩経新講』
(2)	6. 8	19	
(3)	7. 7	12	
(4)	8.24	28	
(5)	9.28	14	熊谷秀師「祖宗釋」
(6)	10.11	9	
(7)	11.30	13	
(8)	12.21	12	と経王寺で新年会
(9)	1.25	12	
(10)	2.22	7	
(11)	3.22	10	
合計		153名	

⑧ 暁烏文庫の由来

さきに「暁烏文庫・古典講座」の紹介が新谷教授によって詳細になされた。（『社会教育研究』第十二号一九〇頁以

下参照)氏の説明では、同講座は「曉烏文庫社会教育事業の一環」として、「金沢大学の教官の協力」を得て、昭和二十五年から二十九年にわたり極めて活発な活動を展開していた大きな実績のある「曉烏文庫委員会」が行う金沢大学の自主的構内開放講座なのである。曉烏敏師のことはさきにもしるしたが、筆者が金沢大学教育学部の前身、国立石川師範男子部付属主事(小中学校長)であった当時、同校長であり引続き初代教育学部長になられた清水曉昇先生は、曉烏家に同家所蔵の五万余部の書籍を一括、師範に寄贈くださる意志がおりかどうか、内々尋ねにあがるように筆者に命じられた。昭和二十一年の秋ごろでなかったかと思う。師の自坊松任市(当時石川郡出城村)北安田の明達寺に上がり、清水校長の意を伝えると、曉烏師は「よからう」とご返事くださった。この間の詳細は『金沢大学教育学部付属小学校百年史』(昭和四十九年十月二日、同史刊行委員会発行)二八七―三一二頁拙稿中にしるしておいたとおりである。曉烏師は、「いれもの」(書庫のこと)があるかということ、これを将来ながく社会教育のために開放してほしいということの二項を注文として出された。もはや三十年近くまえのことになるので、すべて記憶もうつのであるが、多少年月を追って書きしるそう。

〔曉烏文庫の沿革〕

昭和二十一年秋、石川師範より曉烏家へ交渉
昭和二十二年八月一日、曉烏文庫設立趣意書

註 『社会教育研究』第十二号(昭和四十七年五月)一九八―一九頁に「資料(一)」として全文が載せてある。ちなみに同趣意書は筆者が清水校長の命で起稿したものである。曉烏文庫設立委員会は、清水校長と当時の石川県教育会長染村亀鶴、石川県仏教会長曄道文芸両氏との三人の連名で表示されている。

昭和二十二年秋より同二十三年夏まで約一年間、県内師範同窓生等へ抛金の呼びかけ

註 その間の師範在職教官の筆舌に絶する労苦は、これまた新谷教授がさきの文の一九二頁以下にしるした通りである。筆者なども珠洲郡の山奥までおもむいた。しかも戦後ほどない国民生活の極めて苦渋な時期とて、総額七三万円——もとより当時としては只今の二、三千万円にも相当する巨額——にしか達しなかったかに聞く。しかしこの動きがその頃にあったればこそ現在のあの豪壮な金沢大学付属図書館があり得たものであることを万人は銘記すべきである。

昭和二十三年八月、曉烏文庫竣工

註 曉烏文庫設立委員会は事務所を石川師範男子部(金沢市弥生町)におき、同文庫(書庫)を男子付属小学校前庭

に建てた。竣工式の模様は、これまた『付属小学校百年史』二九九頁に載った写真で察知すべきであらう。当時筆者は男子付属主事で、悲しいことに男女両付属合併問題の当事者となり、非力ため、清水校長、三浦茂男子部長以下に多大の迷惑や心配をかけた。しかし、怪我人ひとり出さず無事落着いて、当初広坂に予定されていた教育学部本校も金沢城址に建つに決し、一旦建った弥生町の書庫は、同町公民館に転用された。ちなみに暁烏敏師は同年十一月三日、石川師範へ蔵書寄贈のてがらで北国文化賞を受けた。

昭和二十五年四月二十九日、暁烏文庫委員会発足

註 同日は同時に第一回暁烏記念式挙行の日でもあった。

すでに暁烏文庫としての全図書は旧金沢城内三十間長屋階上・階下にぎっしり納められ、文部省予算で建った閲覧室も竣工して、その階上で挙式された。戸田正三初代金沢大学学長からこの日を毎年「金沢大学・暁烏記念式」日にしたいものと大きな喜びで語り出されたのはすでに二十五年前のことに属する。清水教育学部長は同年九月三十日で退官した。宿願の暁烏文庫が実現したのと、教育学部の無事発足を見たからである。暁烏文庫は教育学部発足の重要な要件の一つであったばかりでなく、われわれの金沢大学教育学部・社会教育研究室が発足する土台ともなったのである。

昭和三十一年四月、社会教育研究室発足

註 忘れもしないが、昭和三十八年三月三日雪の朝、筆者がその年の金沢大学入試実施委員長を命じられ、旧教養部校舎で執務中、至急「暁烏文庫の沿革記」を成せと、図書館長から頼まれた。それは同年三月二十五日発行『暁烏文庫・仏教関係図書目録』の冠頭に載る筈のもので、需めの通り数日後にまとめて提出したが、どんなお都合でか採ってもらえなかったので同年九月に自費出版して石橋雅義学長はじめ有縁のひとに配布した。それは一つには仏教書の整理に尽した藤井信英・竹沢陸・市川三郎ら諸氏、教官としては西村見暁、出雲路暢良両氏の功をながくとどめたかったからである。石橋学長も、そういうことは関係者のデューティ（社会的責任）であると満足された。『暁烏文庫の沿革』（『仏教関係図書目録』出版に当りて）の目次だけを左に掲げておきたい。

目次

- 1 師節昇格と図書拡充
- 2 暁烏文庫設立委員会の発足
暁烏文庫設立趣意書
- 3 暁烏文庫と社会教育
香草文庫を師範学校に寄贈するについて（暁烏敏）
- 4 暁烏文庫と仏教書

これらのうち、「暁烏文庫と社会教育」の章はとくに重要と考えるので左に転載しておきたい。

3 暁烏文庫と社会教育

昭和二十五年四月二十九日、暁烏文庫は正式に明達寺暁烏敏個人所有のものから金沢大学（学長戸田正三）のものに移しかえられた。それは、旧石川師範が、昭和二十四年四月、金沢大学教育学部への解消をとげていたからである。清水校長は引続き初代教育学部長に就任したが、暁烏文庫の完全な実現を見て、わが任終れりとし、同年十月十日付退官した。四月二十九日という日は、戸田学長の提案で、昭和二十六年以降「暁烏記念日」として式事、祝賀行事が例年行われることとなって現在に至っている。行事中、代表的なものは記念論文募集であるが、これには昭和二十六年度に東京大学大学院学生（現北海道大学助教授）藤田宏達氏の「中古天台の研究」が第一回受賞をしたのをはじめ数十点のものが現在までに入賞表彰されてきた。これらの応募論文は暁烏文庫が保存している。しかるに、暁烏師の素意は、暁烏文庫を社会教育のため開放することにあつたから、金沢大学に同文庫が開設されると同時に、病院長松尾宝作氏を主班とした「暁烏文庫社会教育協力会」が出来、

主として財政経費の面で暁烏文庫を背景とする各種の社会教育活動を援助したのであったが、これによって戦後思想の混乱期に「古典講座」「仏教講座」その他の社会教育活動を通じて、暁烏文庫がどの位世間を裨益したか計り知れないのである。「協力会」はその後、概ねその任を果して解散し、五年前に新発足した「社会教育研究室」が今では実質的に暁烏師の精神を継承し、盛んに活躍している。次に旧稿に属するが、同師の香草文庫を手離した時の言葉を掲げよう。

香草文庫を師範学校に寄贈するについて

暁 烏 敏

私は学問のために書物をよせたというよりも、何かしら書物がすぎで書物を買いたつめたという方がよいようです。中学の二、三年のころから書物を買うことにうき身をやつしてきたものです。京都の学生時代には洋服は巡査のお古を買って着たり、間借をして、日四合の米でしつそな自炊をして書物を買いためた。洋行中にも、ホテルの夕飯はたいていミルクホールで間に合はせて好きな本を買いたつめたものです。それがいつのまにか四、五万冊くらいになっているようです。

私はせまい範囲をこつこつ深く探究してゆくという方ではなくて、広く世界の知識にふれてゆきたいという傾向を

もつていますから、蔵書の範囲も相当に多角的です。仏教の学問が中心となっているだけ、仏書は全体の三分の一をしめております。これを一冊ほり出したというものではなくて仏教の全体に亘つて一通り学問が出来るようにとこのうています。仏教の書物については万葉と古事記、書紀の研究書は財を措しまずに集めたつもりです。それにちなんで維新前後の勤皇家、たとえば宣長や松陰という人達に関する著作はたいいていあつまっています。それから明治以後の哲学書や文学書も相当集めました。西洋の書物では、ギリシヤに関するものをはじめ、近代のドイツ・フランス・ロシア・イギリス・アメリカなどの哲学や文芸の書物は原書と訳書とで一通りはそろっています。私の蔵書として人が意外に思うだろうと思はれるのは、社会科学の書物の多いことです。又自然科学に関するものも少しはあります。西洋の旅行中は美術書や考古学の文献など多く集めてきました。それらの中には今日得がたいものも少くありません。書物を集めてみると、この集まつた書物を誰かに利用してもらいたい気が一杯になっています。それで先年大日本文政研究院を設立して、好学の士をむかえて各方面の研究に従事するつもりで、すでに研究者のための宿泊寮も出来ており、書庫の設計も出来ているのだが、敗戦後の今日においては一人として数百万の資材を募集して書庫をたて

る労力は老令になった私としては煩にたえないし、寮には引揚者が十九家族も入りこんでいて、おいそれと出てゆかれそうにも思えない。その中に書物の置場にもこまり、管理がゆきとどかないといつのまにやら紛失してゆくのでこまっています。今年の春高師の校長塩野君と師範の校長清水君とがこられて、晩餐をともしながら高師と師範が合同して学芸大学となつたら二、三千冊寺に残し置く書物の外は、私の文庫としてこれをもろうて下さるようなら寄贈してもよいと話しておりました。その中塩野君が追放になられて高師の方はどうなるのかわからない。師範の方が学芸大学になるのに蔵書が必要であるというのと、清水君が学生時代から親しくしている関係上師範の方にもろうていただくようになります。私の食はず飲まずに買いあつめた蔵書ですから、それを保管し利用することに相当に力をそそいでいただきたいという希望もあります。私は大正四年まで東京にいて雑誌を出していたのであるが、その後は郷里に居を定めて雑誌も出し著書も発行し、郷里を中心として全日本に、あるいは全世界に仏教によつて養はれた教化の宣伝につとめている関係上、郷里の教育に従事する人達によつて利用せられることが最も好ましいので、石川師範の図書の一部に私の香草文庫が設立せられるところをよろこんでいる次第です。勿論仏教の研究に従事する人達

には、特別にその便利をはかっていただくことはおやくそくしてあるのです。師範の方で私の蔵書をむかえるためにいろいろお骨折り下さることをきいて恐縮もし又感謝もしている次第であります。
(22・9・5)

そのようなことで、筆者も当初から暁烏文庫委員として過去二十五年間一貫してこれに関係し、昨年の第二十五回記念式には表彰状を豊田文一現学長からもらった。暁烏文庫が実施した前後六年間の開放講座(『社会教育研究』第十二号、一九五―七頁参照)には細大となくすべて関係してきた。世界学講座(昭28・4―昭29・6の間に九講義

「歴史的危機の内観」テーマで)、聖典講座(大無量寿經、教行信征、摂大乘論)、特別講演会のほかに、前述の古典講座と基礎教養講座があったのである。会場は、石川門寄りの、現在は大学本部(事務局)のある場所にもとあった所の、旧兵舎(第三大隊あと)を改築した階段教室等が会場になっていた。そういうことはやはり、社会教育研究室が現在(いまある場所は旧旅国司令部の建物で、金沢大学海外文化交流委員会がもと使用していた)の場所に移るまで旧教育学部会議室等をさかんに使用して活発に活動した次の時期に連接するもので、あなたがちに仏教思想研究部会にだけ限られたことではないが、内容的には前後、大きい

一貫した経営上にいたるまでの流れをもつものであるだけに、これにふかく注意しておきたい。

なお昭和二十五年から同二十九年まで五箇年にわたり実施された「古典講座」は、その講義テーマは自然科学、社会科学、人文科学のすべての方面にわたったもので、いまから考えても実にスケールの大きいことを、ほとんど全学の教官を動員して実施したものであった。暁烏文庫委員会の自主講座として、将来金沢大学・社会教育活動史のごときものが編集される時があれば、特記されるべきことにちがいない。これがながく中断されていたのを昭和四十三年に十三年ぶりに復活再生したには、そこにやはり大学教育

「仏教思想研究部会開催表」(その七)

昭和44年度			
回数	月日	人数	備 考
(1)	5.24	23	テキスト『維摩經新講』以下同
(2)	6.13	21	
(3)	7.17	11	
(4)	8. 2	22	
(5)	9. 6	24	
(6)	10.17	10	
(7)	11.15	15	
(8)	12.20	14	
(9)	1.31	12	
(10)	2.15	12	
合 計		164名	

中の社会教育の歩みとその時代的要請があったによることであろう。

⑨ 基礎教養講座

さて、さきの「基礎教養講座」であるが、これは昭和二十八年に一講義当り一〇時間、三講座で計三〇時間を費したものである。そしてその「基礎教養」の考えかたのなかに、のちの社会教育研究室時代への基礎教育セミナーとしての流入を見ることができないわけではない。筆者にもその頃、「聖徳太子の三経義疏」をテキストにしてやはり階段教室で講じつづけた記憶がある。聴衆のうちには、作田せつ子（現在、金沢工大付属幼稚園長）、山崎利一（現在、石川県児童文化会館長）両氏のごとき、当時石川県指導主事であった面々もあったように思う。いずれにしても気力に富んだ旺盛な社会教育態勢を、とにかく金沢大学内にもったことではあった。またふたたび古典講座のことをいうが、その二十七回開講中のものに、「大乘仏教と維摩経」（昭和二十七年、橋本芳契担当）「鎌倉仏教の実践哲学」（昭和二十八年、戸頃教官担当）とがふくまれて、いずれも仏教思想に関したものであった。

筆者はその頃、前記研究生島口雅光氏の助けを得て『法句経に聞く』（昭和四十五年二月、教育新潮社）という新

著を成したので、四十五年度中にはこれを研究部会のテキストに用い始めた。

〔仏教思想研究部会開催表〕（その八）

昭和45年度			
回数	月日	人数	備 考
(1)	5. 7	15	『法句経』以下 テキストに聞く 松尾宝作氏代行
(2)	6.27	23	
(3)	7. 4	20	
(4)	8. 1	13	
(5)	8. 8	15	
(6)	9.18	9	
(7)	10. 3	12	
(8)	11. 7	13	
(9)	12.12	10	
(10)	1.23	10	
(11)	2. 6	15	
合 計		155名	

⑩ 部会テキストの変遷

仏教思想研究部会のテキストは、最初に長年、福田正治編『仏教聖典』を丹念に読んだことを既述した。初心者にも、仏教を多少心得たひとにも共通してこの書物が適切と考えてもちいてきたのである。内容は、はじめに「讃仏の歌」をおき、本文は(一)「仏陀」、(二)「教法」、(三)「修道」「教徒」の四編から成り、大体、(一)が仏宝・(二)が法宝・(三)と(四)が僧宝の心なのである。中間に「遇光の歌」があり、

巻末にまた「勸信の歌」がある。文学的なおもむきさえある楽しい仏書である。しかも最後に付録として「仏教史概観」と「菩薩と人間」なる二章がついているから、最も広く読まれてよい良書なのである。増訂版には、「人生手引」として、たとえば「人生に道を失うたとき」は十六頁以下を見よ、というふうに、全書を「人生における課題」の下に読みとれるように工夫してある。その課題数じつに二四三節で、索引ふうにこの本の利用のしかたを出してあるわけである。社会教育としては、場所やしくみが学校とちがうのであるから、こうした宗教書、仏教書にはば広くあたらせるように工夫するのが第一と思う。またとりわけ仏教用語はなじみにくいので、その用語解説に相当努力し、それがわかりかけたために急に仏教教理そのものの理解の道の開けたひとも多かったと思う。そんなことで、一旦入手したテキスト、読みづらかった仏教書への抵抗感が減じていったひと、そして最後には自分自身の人生問題として、心の悩みそのものをわれと見つけ出し、ブッダの教えでそれを自身に解決するようにつとめていくこと、そういう要領で大体において研究室へ出はいりする老若男女さまざまな人たちへの一応の指導はしてきたつもりである。

そんなことで、時にはテキストの眼はなまかえ、また自分で作った書物には自分としての「教科」用の図書として

の含みやら、補説の機会やらもあるので、すでに『維摩經新講』『法句經に聞く』を利用したのであるが、昭和四十六年度にも『法句經』を読けたあとは、四十七年度に平川彰教授の『現代人のための仏教』に変え、四十八年度は『歎異鈔』、四十九年度は『選択集』（法然上人の仏教）として、次第に程度を高めつつ現在に至っている。

〔仏教思想研究部会開催表〕（その九）

昭和46年度				
回数	月日	人数	備 考	
(1)	5.15	37	テキスト『現代人のための仏教』以下同	
(2)	6.19	34		
(3)	7.23	12		
(4)	8.21	16		
(5)	9. 4	30		
(6)	10.10	12		
(7)	11.20	15		
(8)	12.25	13		
(9)	1. 8	15		
(10)	2.13	10		
合 計		194名		

⑪ 社会教育への関心

社会教育への関心は、近年いちじるしく国内で高まりつつある。社会福祉ということばが行政上にも重要視され出し、各地に「福祉」施設ができ、国や地方官庁からの助成

もあるように聞く。さかのばればさきにも一言した公民館のことであるが、当研究室でも相当長期にわたり、八田部落（旧河北郡森本村、現在金沢市に編入）調査をはじめに、美川町・穴水町・あるいは富山県入善町までを公民館運営の問題を中心にして調査研究し、その都度かなり詳細な報告書も成してきているのである。筆者は仏教思想研究の発展ともしてそうした町村現場の調査に班員として加わり、暑い夏に寺院に泊りこみで、昼夜自転車調査に応援の学生や他の班員とかけずり廻ったこともあった。入善のごときは、無寺院の部落で、公民館内に立派な仏壇を置いている例も見られ、仏教とその教理思想の理解研究のため

〔仏教思想研究部会開催表〕（その十）

昭和47年度			
回数	月日	人数	備 考
(1)	4. 8	11	『現代仏教』の テキストのため 以下同
(2)	5. 6	5	
(3)	6.18	17	
(4)	7.29	12	
(5)	9.17	12	
(6)	10. 7	15	
(7)	11.25	7	
(8)	12. 2	13	
(9)	1.27	12	
(10)	2. 3	13	
(11)	3.10	10	
(12)	4.21	8	
合 計		135名	

に、いわゆる社会教育の実際的意義をもって行われている学習形態の推移を察知したことである。

⑫ 回顧より展望へ

それにしても研究室が正式に発足してからすでに十九年になる。本稿ではそのうち資料の見つからない最初の七年（昭和31—37）間を除き、以後の十二年間分の仏教思想研究部会の開催状況を見ることが通じて、筆者が関係した研究室の回顧談をこれまで続けてきた。このあとそれにもとづく将来への展望をしるべきであるが、もはや余白も少ないことである。できるだけ簡単に今後のこの部会、つま

〔仏教思想研究部会開催表〕（その十一）

昭和48年度			
回数	月日	人数	備 考
(1)	6. 2	39	『異教』の テキストのため 以下同
(2)	8. 4	18	
(3)	9. 8	22	
(4)	10.20	12	
(5)	1.26	10	
(6)	3. 2	12	
合 計		113名	

り仏教思想の研究をテーマとした研究室における基礎教養ゼミナーの動向を示して、かつは本稿のむすびとしたい。
 註 この年度は指導者に支障が多くて例年の半分ほどしか部会が開けなかった。けれども毎回充実した会合にはなっていた。

昭和四十九年度は、まだ完了せず、あと昭和五〇年四月までに四回を予定しているのである。テキストも筆者が編した『絵入選択本願念仏集』（中外出版社旧版、昭和四十七年ヨコノ書店刊）を用いている。このさき最初の『仏教者聖典』にもどることも考えられるが、すべては部会参加の研究生と相談して具体的にきめることである。

〔仏教思想研究部会開催表〕（その十二）

昭和49年度（未完）			
回数	月日	人数	備 考
(1)	4. 6	20	『選択本願念仏集』テキスト以下同
(2)	6.15	30	
(3)	9.28	19	
(4)	10.26	15	
(5)	12.14	12	
合 計		96名	
(6)	1.25	以下未実施	
(7)	2.22		
(8)	3.22		
(9)	4.19		

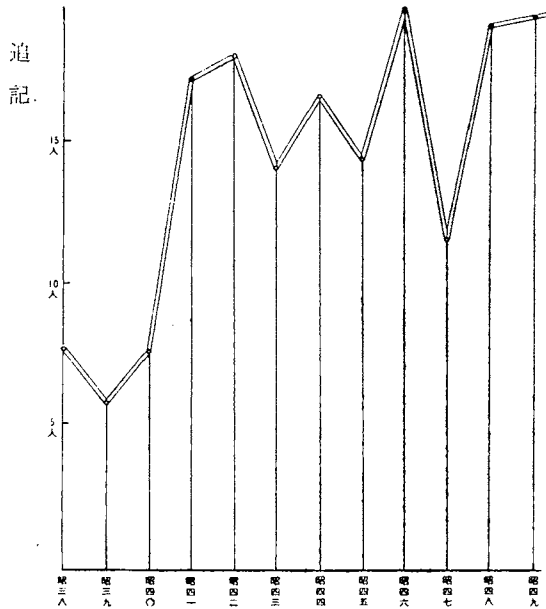
む す び

いまここに本稿をむすぶにあたり、あらためてふかく思うことは、社会教育の厳肅さについてである。すでに新谷教授の総説でも数々のべられているように、大学という機関は決して単に閉鎖的な専門の学問研究だけの場所ではない。大きく国家国民の要望にこたえて建てられた大学の門戸は、つねに地方的にも、したがって社会教育のためにも開放されなければならない。いままで繰返したった四冊の研究部会記録ではあるが、そこに出席各人によって、毎回丹念に記入されたノートを懐かしみ見ながら、古い方にあるいは新しい方にさえいまはすでにこの世にない人々の名をいくつも見て、自分の指導責任者としてこれまでなしてきたことの意義と實際を改めてふかく思いなおすのである。河北郡外日角の医師表宣明氏のごときは、すでに八十をなかばの高令であったが、毎回三、四の質問事項を用意しては、ときには「三八」のあの豪雪をくぐっても来会され、その後はどなくして「これで満足である」と言いのこして帰られたのを最後に見えられなくなった。またいまは研究室員として同僚でもある木村久吉助教夫人は、これまた熱心に亡くなる半歳まえぐらまで研究室に通い、仏教思想部会に出席された。そのうちこれをするしている

筆者自身も、無名の一兵士として昭和十九年六月に入隊したこの旧七連隊あとに、金沢大学の一教官として前後二十五年在職したことを大きな思い出に、石川門をくぐって堀ばたにおりるのである。研究室のいやさかなる発展を祈念するとともに、不十分なわたしのあり方を寛大におゆるし下さった各位に対し、心より感謝のお札を申しあげ、またとくに本稿執筆にまでおひきたて願った新谷教授と古野有隣主事にはあつく御厚意を謝します。

(昭50・1・17)

〔仏教思想研究部会出席者数グラフ〕



追記

本文の研究生出席人数累計は約一、七〇〇名になるが、当初からの人員を加えるならば総人員は二、〇〇〇名を越すだろう。